

---

# オーズ&なのは リリカル大戦2012

てつを

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

オーズ& amp ;なのは リリカル大戦2012

### 【Nコード】

N4857Y

### 【作者名】

てつを

### 【あらすじ】

ミッドチルダにやって来た映司とアंक。

蘇る謎のグリード。

魔法の世界を舞台にメダル争奪戦が幕を開ける。

## プロローグ(前書き)

小説書くの初めてなので不安でいっぱいです。  
更新もかなり遅めの予定です。

## プロローグ

「……」  
とある公園で一人の男がベンチに座りアイスキャンディーを食べている。

眼鏡をかけ、金髪と、顔だけなら優男に見えるがその髪型が合わさり異様な雰囲気醸し出している。

「アंक！」

するとまた別の男が公園に入ってきた。

アंकと呼ばれた男はアイスを食べる手を止めてベンチから立ち上がる。

「どうだった？」

「ただのひったくり、どうってことなかったよ。」

彼の名は火野映司、とにかく困っている人は放っておけず今ひったくりからとられたものを持ち主に返してきたところだ。

ちなみにひったくりはバイクで逃げたが映司はそれに走って追いついた。

「少し見ない間に随分遅くなったな。」

「先輩達にいろいろ教わったからね、ちょっと回り込めば簡単に追いつけたよ。」

アंकは再びアイスを食べようとするが、何かに気づき後ろに振り向く。

「映司、ヤミーだ。」

そう言って3枚の赤、黄、緑のメダルを取り出す。

「これも何か久しぶりだな。」

映司は呟きながらメダルを受け取り、走り出した。

「あんなヤミー居たっけ？」

映司がやってきた場所に居たのはサソリのような姿をしたヤミー。

「まあ、いいや…」

そう言つて映司は腰にオーズドライバーを装着。

そしてタカメダルを左手の指で上に弾き、それを右手でキャッチする。

タカメダルとバツタメダルをドライバーにセットし、続けてトラメダルをセットしそのままドライバーを傾ける。

そして右腰のオースキャナーを手に取り。

「変身：！」

その掛け声とともにオースキャナーでメダルをスキャンした。

「タカ！　トラ！　バツタ！　タ・ト・バ！　タトバ！　タ・ト・バ！」

いくつものメダルのエフェクト共に映司は”仮面ライダーオーズ”へと姿を変えた。

「オーズウウ！」

サソリヤミーはオーズの存在に気づき、襲い掛かる。

「悪いけど、一気に決めさせてもらうぞ。」

だがオーズはサソリヤミーの攻撃を軽く受け流し、トラクローで斬りつける。

そしてそのまま体をひねりバツタレッグで回し蹴りを決め、サソリヤミーを蹴り飛ばす。

起き上つたサソリヤミーは尻尾を伸ばして突き出してきたがタカの目で動きを見切りそれを回避する。

オーズは再びオースキャナーでメダルをスキャンする。

「スキヤニングチャージ！」

バツタレッグが変形し、天高く跳躍する。

すると空中のオーズとサソリヤミーの間に赤、黄、緑の3つのリングが現れる。

オーズはドロップキックの体制をとり、サソリヤミーに向かって急加速。

赤い翼と黄色の爪のエフェクトが現れ、リングを潜っていく。

「セイヤアアアアアアアア！」

オーズの必殺キック、”タトバキック”がサソリヤミーに命中し、サソリヤミーはメダルとなって爆散した。

「終わったか？」

アंकが遅れてやってくる。

「ああ、でもサソリのヤミーなんて今までいなかったよな？」

言いながらアंकに歩み寄るオーズ。

「サソリ…？聞いたこともないな。」

だがその時、

「管理局です！そこから動かないでください！」

「え？」「あ？」

オーズとアंकが声のした方へと振り向くと杖を構えたツインテールの女性が居た。

「えーっと…何か？」

「今さっきここで爆発…が…え…？」

だが喋りながら声は小さくなっていき、杖は下がっていく。

そして…

「ユーノ君…？」

「あ？」

彼女とアंकの眼が合う。

さらに彼女の眼には一筋の涙が流れていた。

「え？あれ？さっきの…」

オーズはアंकと女性を見る。

するとアंकは目を閉じ右手の指を自分の頭に当てる。

「成程な…お前、こいつの仲間か？」

「ユーノ君をどうしたの！？」

再び杖を構えアंकに向ける。

「身体を借りてるだけだ。」

「アंक！とりあえずここはおとなしくした方がいいんじゃない。」

そう言いながら映司は変身を解除する。

「あ、さっきのひったくりの…」

女性の方は映司を見て驚く。

「君、名前は？俺は火野映司。」

「アंकだ。」

2人で名乗る映司とアंक。

「私は…高町なのは。」

「じゃあ、なのはちゃん、詳しい話はするからとりあえず杖はしまつてくれる？」

その後、映司とアंकはなのはに管理局へ連れて行かれた。

## 第1話（前書き）

速くできたけど次は遅くなるかも…

## 第1話

「まあ、遠慮せんで座つてな。」

茶髪の女性、八神はやてに取調室に案内される。

「えつとまずは…」

はやてはアंकを一瞥する、がアंकは相変わらずアイスを食べている。

「映司さんはなんでこのミッドチルダに来たか教えてくれへんかな？」

「俺達はメダルを追つて来たんです。」

映司が答えるとアंकが右腕からタカメダルとタカのセルメダルを取り出す。

「メダルなあ…」

はやては2枚のメダルを見つめる。

「その銀色の方がセルメダル、ヤミーやグリードの体を構成してて

…」

「いや、ええよ、ヤミーとグリードの事はある程度解つとるからな。」

「

それを聞いて映司とアंकも少々驚く。

「実はなヤミーとグリードは少し前からこのミッドチルダに突然現れて暴れ出したんや。」

「それで私達は私達で色々調べてたんです。」

はやての言葉に続いて金髪の女性、フェイト・T・ハラウンが取調室に入ってきた。

「その最中にユーノ君が行方不明になつてな。」

はやてが再びアंकを見る。

「それで？返してもらいたいかな？こいつを。」

「そうして貰いたいところだけど…出来ないんですよね？」

フェイトが映司を見ながら言う。

「うん、実はもうこの人の体は限界に近くて…」

映司が深刻な表情で語り出す。

「俺が離れたら…5分…いや3分ともたないだろうな。」

アंकは食べ終えてごみ箱にアイスの棒を投げ捨てる。

「仕方ないね…しばらくはこのまま、映司さんとアंकにヤミーとグリードとの戦いに協力してもらおうって事に…」

「じゃあ…これからよろしくな。」

そういつてはやてがアंकに右手を伸ばす。

がアंकはそれを無視して取調室を出て行ってしまった。

「あ…ごめん、あいつも根は悪い奴じゃないんだけどな。」

「ええよ、気にしてへんから。」

アंकの代わりに映司が頭を下げる。

「えっと、こんなこと言うのもなんだけど、管理局が調べたグリード達のデータって…」

顔を上げて映司がはやて達に尋ねる。

「それなんだけど、記録してた資料を全部盗られてて…すみません。」

「

フエイトが映司に謝る。

「そつかあ…そう言えば、何でユーノ君の身体が限界だって解ったの？」

ふと疑問に思ったことをはやてに言ってみる映司。

そして返答は…

「うん、女の勘やな、私達はユーノ君の事はよく知ってるからな

あ。」

「???」

映司には理解できなかった。

一方部屋の隅でフエイトは顔を少し赤らめていた。

取調室を出て行ったアंकはそのまま屋上に出て寝っ転がっていた。

「…?!?!?」

しかし、突然起き上り服のポケットに手を突っ込む。

「無い…どっかで落としたか?」

そう言っつて屋上から階段を下りていく。

「あ…」

そこでなのはとばったり鉢合わせる。

「丁度いい、手伝え。」

「ふえ?何?」

アंकはなのはの手を掴み一旦下の階に下りる。

「こいつの眼鏡をどっかに落とした。」

自分に指さしながらなのはにユーノの眼鏡を失くしたことを告げる。

「アंक…何でユーノ君の眼鏡を…?」

「失くしたことなら謝る。」

「え?あ、いやそうじゃなくて探してくれてるのが以外と言っか…

その…」

素直にアंकが謝って来た事に若干惑うなのは。

「さっき失くしたのに気づいてからこいつが探せ<sup>ユーノ</sup>つてうるさくてな。

」

「そっか…ありがとう。」

笑みがこぼれるのは。

「…さっさと探せ、誰かに踏みつぶされてもいいなら話は別だがな。

」

アंकは眼鏡を探しに別の階へ早歩きで降りて行った。

「ヤミーとグリードの事は色々聞いたけど…」

「メダルで戦う戦士なんて初めて見ました。」

オレンジ髪のツインテールの少女、ティアナ・ランスターとその相棒スバル・ナカジマがオーストライバーを興味津々に眺める。

「そんなにすごいかな…?」

「すごいですよ！なんかヒーローみたいです！」

なぜか目を輝かせて映司に迫るスバル。

スバルに詰め寄られて若干退く映司。

「そう言えば映司さん、アंकはどうやってユーノ先生と…？」

「それは解らないんだ、あいつは俺より先にこの世界に来て俺が来た時にはもう…」

全然教えてくれないし、と呟く映司。

「気にならないんですか？」

ティアナは気になるらしく映司に質問してくる。

「うん、まあアंकはアंकなりに言いたくない理由があるんだろ  
うし…。」

「何というか…」

スバルがぼつりと呟く。

「何？」

「映司さんってアंकの事、信頼してるんですね。」

「まあね。」

少し照れくさそうに頬をかく映司だった。

「ありましたよー！」

赤毛の少年とピンク髪の少女、エリオ・モンディアルとキャロ・ル  
ルシエがユーノの眼鏡をフェイトのもとに持っていく。

あの後フェイト達も眼鏡探しを手伝ってくれたおかげで早く発見で  
きた。

「ありがとう、後はアंकに…あ。」

フェイトが眼鏡を手に取るとそれを後ろから突然アंकが取り上げ、  
ポケットにしまう。

そしてアंकはすぐに何処かへ行こうとするが、

「ねえ、アंक…」

「何だ？」

フエイトがアंकを呼びとめ、アंकは振り向かずにごたえる。

「アंकはユーノの頭の中を読み取れるんだよね？」

「まあな。」

アंकは背を向けたまま返答する。

「じゃあユーノは…私の…」

フエイトは言いかけてエリオとキャロの方を振り向き、ハッと我に返る。

「ごめん、何でもない。」

フエイトがそう言うのとアंकは去って行った。

「フエイトさん…？」

「…」

キャロは不思議そうにフエイトを見つめ、エリオを真剣な表情で何かを考えていた。

「お前も苦労してるんだな…」

再び屋上に戻ってきて、貯水タンクの上に座っていたアंकはふと呟く。

「にやはは…気づかれちゃった？」

すると物陰からなのはが現れる。

「お前も知りたいか？」

「ううん、ユーノ君が元に戻ってからでいいよ。」

「だろうな…。」

するとアंकはタンクから飛び降りなのはの目の前に着地する。

「食うか？」

アंकはアイスクャンディーの2本取り出し、片方をなのはに渡す。

「えっと…いいの？」

「俺の口には合わん。」

そう言っただんクに寄り掛かって座る。

なのはは渡されたアイスクャンディーを口に啜えると…

「む…これ何味？」

「抹茶コーラだとさ。」

「毒味？」

「ああ。」

……

「ぷッ」

思わず笑みがこぼれるのは。

「何が可らしい？」

「うーん、なんだかユーノ君と一緒にいるみたいだなあって。」

……

アंकは別のアイス（梨ミルク味）を食べだす、が一瞬表情が歪む。

「これとそのアイスどこで買ったの？」

「なんか変な感じの店だったね。」

「へ？あ……」

なのはが振り向くと映司が屋上に来ていた。

「アंकが他の味に挑戦してみたって言うから買ったのに。」

「そうなんだ……」

「俺だつてアイスが冷たくて”うまい”ってのは解る、ただ今回は

例外だったがな。」

「……？」

”うまい”の所だけ若干強調されてなのはは一瞬気になったがそれもすぐに忘れた。

その直後にヤミー出現のアラームが鳴り響いたからだ。

## 第1話（後書き）

抹茶コーラと梨ミルク 元ネタ解る人いるだろうか？  
感想待ってます。

## 第2話（前書き）

こんな小説でもお気に入りしている人がいてうれしいです。

## 第2話

これまでのオーズ&amp;なのは 3つの出来事！

1つ！

映司とアंकがなのは達と共に時空管理局へ連れてこられる。

2つ！

アंकが今使っている体がなのは達の仲間であるユーノ・スクライアだと判明する。

そして3つ！

休憩中にの映司達の耳にヤミー出現を知らせるアラームが届いた！

カウント・ザ・メダル！

今オーズが使えるメダルは？

タカ×2

トラ×1

バッタ×1

ゴリラ×1

シャチ×1

ミッドチルダの街の中、映司とアंकがライドベンダーで並走する。そしてその後をなのは達”スターズ”がついていく。

「こっちだ！」

アंकがハンドルを捻り道を曲がり、映司達もそれに続く。

「うおおお！」

映司達が辿り着いた先では巨大なオトシブミヤミーが街を荒らしていた。

「アंक、メダル。」

「さつさとメダルに両替して来い。」

映司はライドベンダーを操縦しながらオーズドライバーを装着し、アंकからメダルを受け取る。

そしてメダルをドライバーに装填し、オースキャナーでスキャンする。

「変身！」

『タカ！ トラ！ バッタ！ タ・ト・バ！ タトバ！ タ・ト・バ！』

「あいつは俺が何とかするから、皆は他の人をお願い。」

メダジャリバーを取り出しオトシブミヤミーを見据えるオーズ。

「解ったけど… 1人で大丈夫？」

なのはは心配そうに声をかける。

「大丈夫、それに1人じゃないし。」

オーズはアंकを一瞥してから再びメダジャリバーを構える。

そのオーズのしぐさを見てなのは達は頷く。

「じゃあお願いします！」

なのは達はオーズにヤミーを任せ、民間人の救助に向かった。

「よし… はあああ…っ！」

オトシブミヤミーに向かって走っていく。

「セイヤッ！」

メダジャリバーでヤミーの足を斬りつける。

「！？こいつ硬い！」

しかしダメージを与える事はできずメダジャリバーは止まってしま  
う。

「ギィヤアア！」

オーズの存在に気付いたオトシブミヤミーは巨体を回転させ、オー

ズと向き合っ。

「うわっ」と…」

オトシブミヤミーが身体を回転させただけで、激しい地響きが起こり、体勢を崩してしまっオーズ。

「ガアアアッ！」

その瞬間を見逃さず、足でオーズを踏みつけようとするオトシブミヤミー。

だがオーズは横に跳び、回避する。

「映司！そのヤミー様子が変だぞ！念のためこれ持っとけ！」

アंकが叫び、ゴリラメダルをオーズに投げ渡す。

「サンキュー…うわっ！」

メダルを受け取ったオーズに休む暇なく踏みつけ攻撃を繰り返すオトシブミヤミー。

オーズはライドベンダーに向かって走り出し、セルメダルを投げ入れる。

「グガアアッ！」

次々とオトシブミヤミーの攻撃を避け、ライドベンダーのスイッチを押してバイクモードに変形させ、跳び乗る。

オトシブミヤミーから距離をとり、停車する。

そしてトラメダルを抜き、ゴリラメダルを装填、スキャンする。

『タカ！ ゴリラ！ バッター！』

タカゴリバに変身し、再びメダルをスキャンする。

『スキヤニングチャージ！』

「はあああああ…」

深く構えると同時にオーラングサークルからラインドライブを通してゴリラアームとバッテリーにエネルギーが送られる。

「たあっ！」

オーズはバッテリーで跳び上がり…

「セイヤアアッ！」

3つのリングを潜り右腕を突き出しながらヤミーに向かって突っ込

んでいく。

”タカゴリバパンチ”が炸裂した。

「わっ…!?!」

民間人の救助を終えた瞬間突然鳴り響いた爆音に驚くスバル。

「すごい…ほんとにヤミー倒しちゃうなんて…」

自分達力ならばヤミーを倒すことは十分可能。

しかし、一人である巨大ヤミーを倒してしまった。

ティアナはとんでもない人たちを味方につけたのではないかと思っ  
た。

「映司さん!」

すべて片付き、スバルはオーズに向かって駆け寄り、なのはとティ  
アナもオーズの元へ歩いていく。

「まだ…」

「え?」

不意にオーズが眩き、足を止めるスバル。

急に足を止めたスバルを不思議そうに見つめるのはとティアナ。

「皆来ちゃだめだ!」

オーズがそう言った瞬間…

黒い棒状の何かがオーズとスバルの間の地面に突き刺さり、地面が  
碎ける。

「皆は…!」

「こっちは大丈夫!」

土埃の向こうからなのはの声が聞こえ安堵のため息が漏れるオーズ。  
だがそれも一瞬、オーズはすぐに棒状の物体が何かを確認する。

「これって…サソリの尻尾?」

「映司!すぐに離れる!」

「っ!」

オーズはアंकクの声に反射的に跳びのく。

その瞬間、サソリの尻尾は地面から引き抜かれ戻っていく。

「あれは…グリード…？」

オーズは戻って行った尻尾の先に黒い甲殻に覆われたグリードを見た。

土埃は収まる。

スバルはすぐにオーズのそばまで駆け寄る。

「映司さん！大丈夫ですか！？」

声をかけて反応がない、オーズは誰もいない空間をじっと見つめていた。

よく見ればオーズだけではない、アंकも同じ空間を見つめていた。

「どうかしたの？」

なのはも何が起きたのかわからずアंकの元へ行き問いかける。

「グリードが居た、さっきまでな。」

アंकはそう言って小さく舌打ちする。

「グリードが…？」

スバルとティアナも映司に同じ質問したらしくグリードが居たということに驚いている。

「でも何で襲ってこなかったんだろ？」

「舐められてるんだよ、お前等は。」

アंकはスバルとティアナを一瞥した後になのはを見て、

「お前もな、自分の敵はオーズだけだと思ってやがる。」

「私達は眼中にないって事？」

アंकは何も言わずヘルメットを被り、ライドバンダーに跨る。

「俺達も帰ろう。」

映司もヘルメットを持ってライドバンダーに向かって歩いていき、なのは達も管理局へと戻って行った。

「やれやれ…さっそくやっこしい事になってんな…」  
その時一人の牛乳缶を背負った中年男性が管理局を訪れていた。

## 第2話（後書き）

次回はあの人登場。

そしてアंकとユーノ関係にも少しふれる予定です。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4857y/>

---

オース&なのは リリカル大戦2012

2011年11月20日19時48分発行